＜Ⅵ　展示研究報告（2）＞

第32回特別展
「復興から未来へ～博物館と地域のこれから～」

川本　利恵*

はじめに

令和２年度は、第 32 回特別展「復興から未来へ～博物館と地域のこれから～」を、令和２（2020）年 10 月６日（火）～ 10 月 23 日（金）の期間、千代田三番町キャンパス（以下、「三番町」という。）１号館ロビーにおいてプレ展示として、11 月９日（月）～令和３（2021）年２月５日（金）の期間、本展示として町田キャンパス（以下、「町田」という。）生活文化博物館にて開催した。

この企画は令和元（2019）年に着任された石垣悟准教授（現代生活学部現代家政学科）（以下､「石垣先生」という。）の専門が民俗学と博物館学とのことで、博物館事業にも係わっていただくことになり、次年度の特別展の企画として提案してくださったことから始まった。

これは、石垣先生が前職で係わっていた大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト（以下、「津波プロジェクト」という。）の一環として岩手県の陸前高田市立博物館（以下、「陸高博」という。）所蔵の資料を使った展示であった。津波プロジェクトは、岩手県立博物館（以下､「県博」という。）が中核館となり、公益財団法人 日本博物館協会（以下、「日博協」という。）や ICOM（国際博物館会議）日本委員会の協力を得、文化庁の補助金を受けながら活動している「津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会」が携わっている。陸高博の資料は東日本大震災の津波による被害を受けており、救助されてから修復作業が終わったものを巡回展として博物館等で展示されてきた。

山村明子（現代生活学部現代家政学科教授）館長（以下「山村館長」という。）とも相談して、参加することになり、令和元年５月 22 日（水）の運営委員会でも承認された。

石垣先生に申込んでもらい、他の館と競合することがなかったので、参加が認められた。

1. 資料の選定

令和元年度の博物館実習における館園実習で実習先を陸高博とし、８月５日（月）～９日（金）の５日間、学生とともに筆者も同行した。修復作業の見学や博物館業務の手伝いとして神社の猫の絵馬や奉納物の寄贈資料の受け取りや清掃、計測作業を行った。これは、特別展に借用する資料の下見も兼ねており、収蔵庫の見学の際に、大まかな目測を立てた。

また、期間中に陸高博館長のご配慮で、近隣の大船渡市立博物館（以下、「大船渡博」という。）へご紹介いただき、津波関連資料展示の説明を受けた。このとき、明治期の津波を描いた錦絵と津波が襲ってきた状況を編集した映像も見学し、できれば借用したいと心に留めた。

この時点では、資料の詳細は、次年度の館園実習で再び訪れたときに決めようということになった。
実習後は、石垣先生からこれまでに開催された修復資料を使用した展覧会の図録やシンポジウムの報告書などを提供してもらい、それらを参考にして、資料のピックアップを行った。そして、令和２年になり、県博で関連の展覧会が開かれるとの情報を受け、石垣先生に仲介をお願いして日程の調整を行い､1 月 29 日（水）～ 31 日（金）の３日間岩手県へ出張した。30 日（木）に県博へ伺い、展覧会担当の方の展示説明を聞き、修復事業を担当されていた館員の方に修復作業についてのお話しや特別展の内容について、また資料を借りる際の注意点などを伺った。前後の２日間は盛岡駅周辺の美術館、博物館、城跡などを見学した。この出張で、かなり借用資料を固めることができた。

2. テーマの決定

津波プロジェクトでは、巡回展とはいっても、そっ

*川本　利恵（かわもと　りえ）令和２年度生活文化博物館学芸員

くりそのままではなく、担当する館独自の視点で企画した内容が盛り込まれており、当館でもその部分を考えなくてはならなかった。東日本大震災から10年がすぎ、記憶が薄れつつある昨今だが、関東圏や東海圏での大規模地震の懸念は引き続き存在し、また、近年は台風などによる水害も顕著であることを踏まえ、改めて防災意識を高めてもらう機会にしたいと考え、当館近隣地域の東京都町田市、神奈川県相模原市の防災に関する政策や防災マップの研究、家庭での防災への備えなどを盛り込むことにした。そして、防災に関する部分は大学博物館の利点を活かし、学芸員課程を受講している学生が担当することになった。

3. 展示構成

修復資料は、陸前高田市域の漁撈用具関係が多く、それを中心にして日常生活や行事に関連するもの、女歌舞伎として有名だった高田歌舞伎にまつわるものを追加して、出張後、仮の資料リストを作成した。令和2年度の館園実習で再び陸高博へ行き、実物を見ながら最終決定しようと考えていたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、早期の収息が望めなくなり、メールやオンラインでの打合せを考慮することになった。

(1) 館内打合せ

緊急事態宣言が解除され、6月4日（木）に石垣先生と三番町で打合せを行った。資料リストや特別展までのスケジュール、展示構成について相談した。4部構成とし、第1部は当時の被災状況と過去の津波被害を写真と錦絵で見せる。第2部は資料の救助の様子を写した写真と被災したままの資料を、第3部は修復された資料を、第4部はハザードマップや防災グッズを展示するとした。また、大船渡博の津波DVDをモニターで流すことも付け加えた。

ワークショップは、紙資料脱塩の実演を、KVA祭（大学祭）の2日間それぞれ1回ずつ、公開講座については11月末か12月初めに、修復されたリードオルガンの演奏会を考えた。さらに、石垣先生には印刷物に投稿してもらう原稿を依頼した。

そして、それまで未定だったタイトル名を決めた。これまで“復興”のみを目指してきて、いまだ道半ばだが、10年という区切りでさらにその先を見据える時期ではないかと考え、“復興から未来へ”とし、サブタイトルとして、博物館はそこにどのように係わっていけるのかという意味を込めて“博物館と地域のこれから”と付けた。

7月2日（木）山村館長と三番町で打合せを行った。展示資料リストと特別展開催までのスケジュール表をもとに印刷物の大まかな原稿内容、提出期限を、また資料写真を見ながら、借用資料の説明をした。また、ワークショップと公開講座についても説明し、その内容で作業を進めることになった。

7月16日（木）に陸高博の担当者2名と石垣先生とを交えて、三番町にてリモートでの打合せを行った。仮作成のリストをもとに同じ冊子の同じページの何番の資料といったようにすり合わせをしていった。このとき陸高博では新博物館を建設中で、そこに展示予定の資料と重ならないようにするため、一部貝類などは希望を伝えて、それに見合うように選んでもらうことにした。また、参考資料として展示予定の、昨年度の館園実習で整理作業をした絵馬や猫像も点数を伝えて選定はお任せした。

最終的な展示資料は、写真等15点、被災したままの資料5点、人形や人々の暮らしを写した写真10点、リードオルガン1点、漁撈用具類41点、貝類15点、高田歌舞伎関係10点、ハザードマップや防災グッズ12点、参考展示の絵馬10点、猫像1点となった。

構成は下記の通りである。

第1部：被災
第2部：資料の搬出
第3部：資料の修理・安定化
第4部：防災と避難
参考展示：学生の活動

(2) 津波プロジェクト関係者打合せ

今回の特別展では、借用資料の配送に当たっては、津波プロジェクトの費用で賄われることになっており、また、当館だけが修復資料関連の展覧会を開催するのではないため、プロジェクト全体の計画をすり合わせる打合せが行われた。今年度は、他に大阪市の大阪自然史博物館（以下、「自然史博」という。）が開催予定だった。

・7月7日（火）第1回打合せ

県博、日博協の担当者と自然史博の学芸員1名、当館から筆者と石垣先生が参加した。内容は、当館の特別展の概要と借用資料の説明をし、脱塩のワークショップとリードオルガンの演奏を計画していることを話した。また、今年度のプロジェクト内の展覧会を開く自然史博の特別展の内容が話された。それに対して、県博の担当者から、資料の現在の保存場所、県博なのか陸高博にあるのかの説明があった。東京都の緊急事

態宣言は解除されているが、感染者数は３桁あり、岩手県はまだ０人であったので、東京や大阪に配送してくれる美術梱包を扱う会社があるかどうかわからないから、鉄道のコンテナ輸送の可能性もあるとのことだった。今後はメールでの対応を中心にしていくが今回陸高博の担当者が欠席であったので陸高博を含めた打合せを近いうちにしたいという話で終了となった。

・７月21日（火）第２回打合せ

陸高博の担当者が加わり、最初に陸高博が携わる研修会や見学会のことが報告され、その後資料によって貸出が可能かどうかや、当館と自然史博の資料の搬入時期が話し合われた。当館としてはプレ展示があるので、９月末か10月初めと要望し、自然史博も９月末頃との要望があった。前回の打合せから２週間余りで感染が拡大しており、当館では、KVA祭中止の報を受けて、ワークショップとリードオルガン演奏について延期か動画形式での配信を検討しているとの説明をした。また、大船渡博から借用を予定していた錦絵は県博所蔵の錦絵画像に代替し、津波のDVDは宅配便等で対応することも伝えたので、配送に関しては９月末に県博と陸高博を経由して東京、そして大阪へ向かうという順路で運送会社へ見積をとってもらうことになった。

・８月７日（金）第３回打合せ

当館からは、筆者のみが参加し、感染拡大の影響で、特別展は資料の搬送が可能ならば開催し、ワークショップとリードオルガンの演奏は中止すると告げた。日博協の担当者から過去の演奏のCDが発売されているという情報を得たので、CDを購入し、その音源を流すことにした。

また、日博協から、各館が作成するポスターとは別に今年度の津波プロジェクト全体のポスターを作成するため、原稿の依頼と発行までの手順が説明された。配送関係では搬出の希望日を、資料点数については変更がないので、陸高博で大きさを入力をしてもらえば完成すると伝えた。県博の担当者からは、梱包する際に個々の大きさの他に収納しているケースを含めた大きさも教えてほしいとの要望がり、陸高博が対応することになった。

この後は、メールで対応をするとのことで終了した。

後日、経過報告でメールにて運送会社へ提出する仕様書が送られ、東京と大阪は別々に配送されることになり、当館担当の運送会社の名称と搬入日10月２日（金）、搬出日２月６日（土）が知らされた。

4. 印刷物

今回は資料の撮影のためにわざわざ搬入することができないため、写真は陸高博から送ってもらったものや関連冊子からのスキャナデータを利用した。

（1）チラシ

チラシは発行部数を例年通り3000枚とした。これまでの移管資料展シリーズではチラシの表には展示資料から１点を配する構成にしていたが、今回はいくつかの資料を配することにした。チラシの裏面には例年通り、あいさつ文と展示資料の一部を掲載した。９月１日（火）に入稿し、10月２日（金）に納品となった。

タイトルの“未来へ”から、当初上に向かって広がっていくイメージと道が続いているというイメージがあり、印刷所で２案を作成してもらい、館員に見てもらったところ、道の方が選ばれた。ただ土の道はのっぺりしてベニヤ板のように見えるので石畳に変更した。そして陽の差す空には、歩む先に明るい未来があるという希望を表現した。（写真１）

チラシの裏面（写真２）は、あいさつ文と資料写真６点、町田・三番町両キャンパスの地図を配した。

写真１　チラシ表面

写真2　チラシ裏面

写真4　資料とコラム部分

(2) 展示目録

目録の表紙（写真3）には、これまで白地の中央に1点だけ大きく資料写真を載せていたが、資料を何点か配することにし、東北地方の地図を下地に、陸前高田市の位置を赤くし、そこから資料が飛びだしたというイメージで作成した。

内容は、あいさつ文、石垣先生による陸高博資料に関する解説文、学生による防災に関する解説文、各資料の説明、リードオルガンに関するコラム（写真4）、展示資料一覧という形式とした。資料の説明は筆者が執筆し石垣先生が校正した。

9月1日（火）に入稿し、10月8日（木）に1,000部納品となった。納品後内容の確認をした際に、画像の取り違えなど誤りが見つかり、正誤表を作成して差込みをした。

写真3　資料目録表紙

5. 展示作業

資料の搬入は10月2日（金）に行われた。リードオルガンだけは、展示室の一角に展示台を設置して、その上に置いてもらい、特別展の展示作業が始まるまで、布を被せておき、ボードを2枚前に置いて目隠しにした。残りの資料は梱包状態のまま、町田の大江記念棟にある学院史資料室へ保管した。

(1) プレ展示

チラシ、解説パネルと垂れ幕が10月2日（金）に納品となり、翌週の10月5日（月）に大学の公用車に資料とチラシ類を積んで三番町へ行き、展示作業を行った。三番町の1号館ロビーには常時2台のレンタル展示ケースが設置されており、借用資料の中でも小さ目のものを選び、釣り針やカギ類5点、土人形2点、的打ちの的2点、高田歌舞伎のかんざし3点を展示した。ケース裏の壁面にはあいさつ文のパネルと解説パネルを2枚、垂れ幕1枚を掛けた。また、展示ケースのそばに机を置いてもらい、チラシと展示目録を置いた。机の前には、チラシの表を大判コピーしたものをポスターとして貼った。津波プロジェクト自体のポスター・チラシもすでに送られてきていたので、それらも同様にした（写真5）。展示ケースの向かい側には垂れ幕2枚を掛けた。

展示目録は10月8日（木）の納品予定で開催日に間に合わなかったため、「希望者は事務局へ申し出てください。」とのパネルを置き、納品された目録は三番町便で送付し、事務局の方に配付を頼んだ。

10月26日（月）に再び公用車で次の展示資料を乗せて三番町へ向かい、プレ展示の片付けを行い、資料はまた公用車で町田に返送した。展示ケースは次の展

示資料を置いたので、向かい側の垂れ幕の前に机を移動し、本展示の会期が終了するまでそのままにした(写真6)。

写真5　展示風景

写真6　プレ展示後

(2) 本展示

プレ展示の片付けと同時に、本展示会場である町田の博物館展示室での作業が始まった。まず企画展の片づけを行い、10月28日（水）から展示作業に入った。まず、学院史資料室から資料の入った段ボール箱を運び入れた。当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大きさの「柱ケース」と称する4種類の展示ケースがあり、計画していた位置に展示ケースを移動してから、箱を開封し、それぞれのケースへ資料を振り分けていった。

今回、第1部は写真パネルのみのため、通常の順路とは違うが、展示室の入口を入って廊下側の壁面に貼り付けた（写真7）。第2部の一部の写真パネルも同時に貼り、間に解説パネルを取り付けた。モニターには大船渡博から借用した津波のDVDを映した。当初は映像を繰り返し流そうと考えていたが、見たい人がリモコンを操作してみられるように案内パネルを置いた。入口右手の壁面には中ケース1台を置き、被災状態のままの資料（写真8）を入れた。被災資料は透明な袋に密封された状態のままにした。続いて第3部の始まりとして柱ケース3台を並べ、それぞれ土人形と的打ちの的、陸前高田市域の風景や生業、行事を写した写真を入れた。窓側にはリードオルガン（写真9）を置き、ベルトパーテーションで覆った。それ以降には漁撈用具を置いた。中ケース2台に、ノリアミ（写真10）、ナウジカゴ、ムカゴを入れ、続く大ケース1台にはカンバン、ハンテン（写真11）を入れた。どちらも大漁を祝ったものである。そこから直角に曲がり、中ケース2台にイサリ、ハムドウ、シメドウ（写真12）、ホシカゴ、テンテンを入れた。背中合わせで中ケースからコの字状に大ケース2台を置き、高田歌舞伎のかつらやかんざしを入れ、衣桁に掛けた歌舞伎の上着と下着（写真13）を入れた。さらに直角に曲がり、中ケース2台に学生が担当したハザードマップや、防災グッズ（写真14）を入れた。それに向かい合う壁面には学生の活動として、昨年度の館園実習の様子を写真パネルで紹介し、棚台には猫の絵馬や奉納物を置いた。

中央にのぞきケース3台と2台でそれぞれ背中合わせにして島を作り、2台にはそれぞれタモとヒシャク、ヤスとモリ、ミズカガミ（写真15）を入れた。ミズカガミは2個で縦向きと横向きに置き、底面にガラスがはめられていることがわかるようにした。3台の方には、それぞれ発掘された縄文時代の釣り針と現代の釣り針を、アワビやカキなどの身近な貝や日本近海で採取された貝類（写真16）を、アワビやホヤを獲るカギ類や舟を操る際のサオウケ、ヒキバケ、トッパヒキノイタを入れた。

写真7　第1部の写真パネル

写真8　被災したままの資料

写真9　リードオルガン

写真10　ノリアミ

写真11　カンバン（後）、ハンテン（前）

写真12　イサリ（左）、ハムドウ（上）、シメドウ（右）

写真13　高田歌舞伎下着

写真14　防災グッズ

写真15　ヤス（左下）、モリ（左上）、ミズカガミ（右）

写真16　貝類

6. 広報活動

本学教職員には、チラシや展示目録を配付し、学生には本学構内にポスターを掲示して周知をはかった。また、エントランスの管理棟の入り口（写真17）と第3号棟の入り口、附属図書館の入り口に垂れ幕を掛けた。なお、各新聞社、博物館、各県の教育委員会などの関係機関へチラシ、展示目録の配送を行った。

今回は、地域情報誌「ショッパー」の11月6日（金）号に特別展の紹介記事が掲載された。

写真17　エントランスの垂れ幕

7. 特別展開催

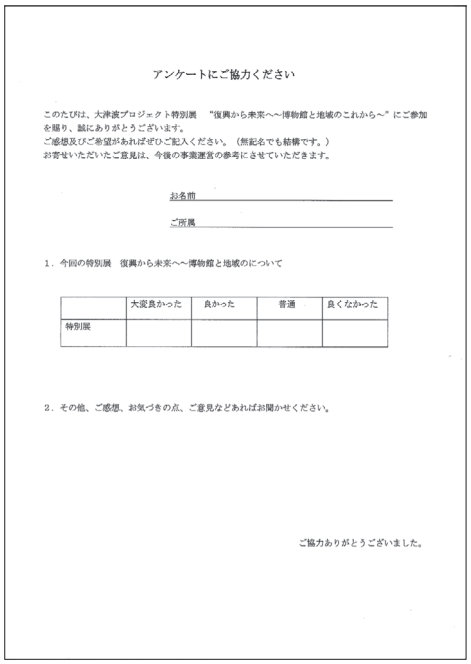
10月8日（火）にプレ展示がオープンし、展示場所がロビーということもあり、学生が行き帰りに立ち止まって見ていく光景が多くみられた。

11月9日（月）からの本展示については、学内外の見学者に対して事前予約の案内を出した。オープンした週の11月13日（金）には、津波プロジェクト関係者の県博館長と担当者の方、日博協から専務理事と事務の方2名が見学にいらっしゃった。当館では、山村館長も石垣先生も不在であり、代わりに大学の事務局長に挨拶を頼んだ。展示の説明は筆者が行い、良い評価をいただけた。

その週末にはKVA祭（大学祭）が開催予定だったが、感染拡大のおり、中止となった。ギャラリートークも中止となったが外出を控えている方々にも見ていただけるよう12月22日（火）に解説動画を撮影し、編集後、年明けにYouTubeにアップした。このことはホームページ上でも紹介した。解説は石垣先生にお願いした。※動画は会期終了後も継続して公開している。

見学者に対するアンケートは例年希望者のみに行っているが、今回は津波プロジェクトで用意された用紙を使ってほしいとの要望があったので、その用紙（写真18）を使った。

アンケート用紙は閉館する際に目を通していたが、開催後早々に、第1部の場所がわかりにくいとの意見を受け、順路を矢印で示すパネル（写真19）を設置した。



アンケートにご協力ください

このたびは、大津波プロジェクト特別展　"復興から未来へ～博物館と地域のこれから～" にご参加を賜り、誠にありがとうございます。
ご感想及びご希望があればぜひご記入ください。（無記名でも結構です。）
お寄せいただいたご意見は、今後の事業運営の参考にさせていただきます。

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご所属＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1．今回の特別展　復興から未来へ～博物館と地域のについて

	大変良かった	良かった	普通	良くなかった
特別展				

2．その他、ご感想、お気づきの点、ご意見などあればお聞かせください。

ご協力ありがとうございました。

写真18　アンケート用紙

写真19　順路パネル

8. 資料の搬出

令和３年２月５日（金）に特別展が終了し、その翌日６日（土）の午前中をかけて、運送会社による資料の搬出が行われた。展示するときは当館員で行ったが、このときは社員の方々が展示ケースから取り出して梱包するまでの一連の作業を行った（写真 20）。

大船渡博の DVD は、翌週郵送した。

写真20　資料梱包

おわりに

今回は大きなプロジェクトに参加した特別展ということで、筆者自身他館からの借用資料を扱うことが不慣れだったことで色々と戸惑いがあり、さらに新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況に振り回された年になった。令和３年１月８日（金）からは再び緊急事態宣言が出され、休館とはしなかったが、会期全般を通して例年に比べ来館者は少なかった。

東日本大震災の記憶を残し伝えていくための貴重な機会、そしてわが国が常に自然災害にさらされる危険があることを認知し、防災意識を高めるための機会となる展覧会であったので、非常に残念だった。来館された皆さんや動画を見てくださった皆さんが関心をもっていただけたのなら幸いである。

最後に、多大なご協力をいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。